

大学教授の三条件

大学教授は不思議な職業である。確かに、恵まれているとみえる要素が多い。講義日は、たいてい毎週二、三日にすぎないばかりか、長い夏休みも享受できるので、他の職業に比べて自由時間が格段に多い。また教育に関わる職業でありながら、事前に教育概論を履修していることが求められることはなく、制度的に特定の資格試験が規定されているわけでもない。さらに、若い世代を相手にするので、常に若々しい気分でいられる。そして大学のキャンパスは、たいてい広々とした緑の多い場所に立地しているので、職場の物理的環境にも恵まれている。また、また一般企業と違い、定年前に肩たたきで退職を求められることもまずない。そのうえ、社会的信用も高い。そして、これらのメリットにもかかわらず、給料が劣悪というわけでもない(さして高水準ではないが)。

良いことづくめのように見える。だが、誰でもすぐにこの職業に就けるという仕組みにはなっていない。ということは、大学教授には、当然の前提とされてる基本的な資格があるからではないか。それは、次の三つの条件だと私は思う。

探求心

第一は、社会現象やものごとについて、従来とは異なる新しい視点から、あるいは最も深いところから理解してみようという姿勢、すなわち「探求心」を持っていることである。他の誰も考えつかない新しい知見を得ようという姿勢が直接これに該当する。また、それだけでなく、既存の知識を一つの新しい枠組みに従って組立て直してみようという姿勢もこれに含めて考えてよかる。要するに、新しい切り口の発見だ。社会科学の場合、状況が種々変化するなかでも一つの視点ないし枠組みに則って対象を切り取ってみる姿勢とその勇氣、それが研究者の基本的条件といえるではないか。逆にいえば、社会の状況をその時々につじつまを合わせて器用に解説する仕事、それは評論家の仕事であり、研究者のそれではない。

探求心があれば、それは結局のところ、学術論文に結実するはずである。頭の中に漠然としたイメージを宿しているのと、論文として完成させるのとでは格段の隔たりがあり、また学会や社会に対する貢献度も異なってくる。大学教授の仕事の大きな部分が論文で評価されるのは、けだし当然であろう。

教育心

第二は、当該分野における高度の知識を学生に伝授することができるだけでなく、上

記のような探求心が人間として社会に生きていくうえで重要であることを学生に心底から納得させ、また学生が自分の頭で考える習慣をつけさせようとする姿勢があることである。すなわち「教育心」があることだ。あるいは、教育に対する情熱と責任感といってもよいと思う。

これには二つの面がある。一つは、探求心や自分の頭で考えることの重要性をいくら口先で説いてみたところで、それだけで教育の成果が得られるものではないことだ。学生は、教師自らがそれを実践していることを見せられてはじめて、それらのことを納得する。だから、大学教授の教育面での責務は、高校までの教育とは本質的に異なり、研究活動(上記第一の条件)と一体化してはじめて果たすことができるものとなる。もう一つの面は、大学教授にとっても解らないことはいくらもあるわけだから、そうした場合には自分自身まだ理解ないし解明できていない、ということを学生に対して述べる誠実さと勇気が求められることではないか。こうしたウソのない姿勢があつてこそ、学生に対する教育がほんとうに意味を持つ、と私は思う。

「教える」ことから得られる恩恵には、大きいものがある。それは、次の世代を担う若者を育てるといふ喜びのほか、教えることを通して教える側が多くのことを結果的に学ぶことになる点である。教壇に立って講義をする(ものごとを第三者に教える)場合には、単に本人がそれを理解できている、というのとは格段に異なる深い理解を必要とする。だから「教えることは学ぶこと」になる。現に、学界に転出している当会(日本銀行旧友会)メンバー各氏からは、常々このことを聞く機会が多い。

自己規律力

第三の条件は、従来あまり述べられていないことであるが、自分自身の行動を職務遂行に向けて自ら責任をもって完全に管理できること、つまり「自己規律力」をもっていることである。むろん、聖人君子になることは求められてはいまいが、大学教授は就業規則や社訓といった面からの強い規律付けが乏しいので、自分自身のなかに倫理的な羅針盤を持ち、それに従った行動ができること、が求められていると思う。とくに、圧倒的な自由時間を自己管理できることが不可欠の条件になるといえるのではないか。

講義日が少なく、また夏休み期間も長いので、第三者からみた場合「優雅な時間が持てていいですね」などと冷やかされることがある。それどころか、大学教員にはたいていサバティカル・リープ(研究休暇)の制度があり、通常、六年間継続して講義を行えば次の一年間は講義や学内任務から一切開放される(この間に何をするかは自由である。筆者は幸いにも現在その期間中である)。こうした自由度の高さは、あくまで時間を責任を

持って自己管理できることが前提となる時に初めて成立するものである。こうした自由度の高さとそれに伴う自己規律力こそは、他の多くの職業と本質的に異なる一つの特徴ではなからうか。

探求心、教育心、そして自己規律力。一人の大学教授を取りだした場合、これら三つをそれぞれどの程度、どのような組み合わせで満たすかには様々なパターンがあろう。果たして、自分はこれらを満たすのであろうか。各要件の絶対水準に照らした判断はむろん本人にできることではないが、それらの条件について自分がどちらの方向に変化しているかは、各自ある程度自覚できることかもしれない。ともあれ、大学教員になってから一〇年近くになろうとしている現在、向上心を失わず、この恵まれたそして責任の大きい職務に一層励んでいきたいと思っている。

(日本銀行旧友会会報「日の友」三八三号、二 二年一月)